

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 21 日現在

機関番号：14201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653082

研究課題名(和文)企業統治から組織統治へのパラダイム転換の試み

研究課題名(英文)Changing the paradigm from corporate governance toward organizational governance

研究代表者

伊藤 博之(Ito, Hiroyuki)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：20242969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：主にフランスの哲学者ミシェル・フーコーの統治性分析を基本的な思考枠組みとして設定し、企業統治の言説的諸実践がどのように発展してきたのか、それが日米の企業統治制度の違いとしてどのような差を生み出したのか、また、個別の企業の統治の実践において企業統治の言説がどのような役割を果たしてきたのかの試論を展開した。

研究成果の概要(英文)：Based on the concept of governability of Michel Foucault, a genealogical study on practical discourses of corporate governance had been conducted. The historical development of corporate governance in Japan and the US was described from the viewpoint, as well. Furthermore, a case study on Hewlett-Packard was presented to show how governability can be easily destroyed.

研究分野：経営学

キーワード：企業統治 組織統治 統治性 フーコー

1. 研究開始当初の背景

(1) 企業統治論は、これまで金融論や会社法などの議論の影響力が大きく、実務上の制度改正の議論にも同様の偏向が見られた。また、経営学の分野でも、これまで企業統治論に近い領域として会社支配論があったとされるが、それは主に大企業の影響力を以下に制御し公正な経済社会を実現するか、に考察の中心があった。すなわち、これまで企業統治論については大きな議論の偏りがあった。

(2) 統治という用語は、経営学の文脈を外れると政治哲学のキーワードであった。統治についての議論は、プラトンやアリストテレス等のギリシア哲学、中世のスコラ哲学、近代の政治哲学では中心的なものであった。とりわけ、フランスの哲学者ミシェル・フーコーは統治性分析という論考テーマを掲げ、統治が権力、主体、知、実践とどのようなかわりを持っているかを考察してきた。これらの観点から企業統治論をどのように理解できるかを考察することが本研究の出発点となった。

2. 研究の目的

(1) 統治という概念を企業統治論のこれまでの文脈から離れてどのように理解できるのかを考察していくことが第一の目的であった。その際、政治哲学のこれまでの統治の理解を省みながらも、フーコーの統治性分析を基礎に据えることとした。

(2) 企業統治論の議論が現在のかたちに偏向したのにはどのような理由があり、またそれはどのような歴史的な経緯を辿ったのかを、会社支配論、金融論、会社法、経営史などの分野も参照しつつ、また、フーコーの系譜学という歴史分析の方法を応用することとした。

(3) 個別の企業において、この新しい視点から統治をどのように理解できるのかを事例分析を行うこととした。その際、過去超優良企業とされていたが、近年経営者の選任の失敗や取締役会内部の混乱の結果、経営に失敗したとされる米国のヒューレット・パッカ―ド社を事例として選択することとした。

3. 研究の方法

(1) 理論的なフレームワークとしては、政治哲学とフーコーの著書を読み込むことで、そこで統治とは何を意味するのかを考察することとした。

(2) 企業統治については、現在それについてどのような議論があるのか、また、株式会社の制度についての過去の文献をレビューした。

(3) 広い意味で企業統治に関連するのであ

れあろう事例を広く収取するため、名経営者とされる人々についての書籍、経営の失敗事例についての文献などを広範囲に読み進めた。

(4) 企業統治制度の日米の過去 30 年程度の改革の進展を整理した。またその背景にあった事件や政治的な動向も把握することに務めた。

(5) 事例研究に取り上げたヒューレット・パッカ―ド社についての資料を収集し、それを組織統治という観点から解釈した。

4. 研究成果

(1) 統治という概念については、フーコーの統治性分析がきわめて有効であることを確認した。フーコーによれば、統治とは人やモノ、実践を適切に配置することである。それはフーコーの知や権力の概念とも密接にかかわる。また、さらに、他者を統治するためには自己の統治が必要になるし、常に、人々は統治に対して自己の統治を問われていることをフーコーは指摘した。このような統治観によれば、統治する主体には常に徳や倫理が求められる。

(2) 統治する主体に徳や倫理が求められるという論点は、これまでの企業統治論が経営者のインセンティブに訴えたことと対照的である。ここでは、経営者は自己的な行為者として当然視されている。彼の自己愛や欲望に訴えることでのみ統治はなされうるという考えがそこにはある。一方、フーコーの統治観は経営者の自己涵養を通じた統治の論理を展開する可能性を提示する。このような考え方は東洋の儒学などに固有のものとも見えるかもしれないが、政治哲学の考察からギリシア哲学にまでさかのぼる西洋の政治思想の原理でもあることが確認された。

(3) 企業統治のこれまでの議論は経営学よりも金融論や会社法との関連が強いことを確認した。経営学では会社支配論が統治に近い問題意識を持っていたが、そこでは主に大企業の独占力をいかに制御するかが論題であり、企業の競争力を高めるように経営者をどう規律づけるかは論じられてこなかった。むしろ企業統治論の枠組みを作ったのは、70年代後半に始まる新自由主義の政策やそれを支えた経済思想、エージェンシー理論の復興、投資家資本主義の勃興であった。このような企業統治論成立の歴史をフーコーの系譜学というアプローチにより記述した。

(4) 以上の諸論点と関連させつつ、1 企業の中に企業統治という統治性がどのように現れるかの解釈を試みた。事例として採用したのはヒューレット・パッカ―ド社であり、とりわけ、生え抜き経営者を輩出すること

伝統として誇っていた同社が、社外から CEO を招聘するという出来事を組織統治という概念構成のもとで解釈した。そこではいくつかの発見事実があった。

第一に、同社では、過去成功してきた事業モデルとは矛盾をきたす新事業を開始し、その売上比率が年々増加し続けていたことが、統治性を維持することを困難にし続けていたことである(ただし、それが同社の成長を支えた成功の要因でもあった)。

第二に、上記の状況に適応すべく、統治性を変化させようとした経営者に対して難色を示したのが創業者であった。創業者は自己の成功によって作り上げた統治性を維持しようとした。

第三に、新しく選任された経営者は創業者の信奉する統治性を堅持する方針に従った。また、この経営方針は、一部の例外を除いて、社員の多くに支持された。しかしそれは同社の成長の推進力であった新事業の戦略の妨害となる。

第四に、創業者が死去した後、取締役会は路線を急旋回させる。当時はアメリカで株価至上主義がほぼ頂点に達する時期にあたり、また後にラケシュ・クラナが「カリスマ幻想」と呼んだ自体がアメリカのビジネス界を蔓延している時期であった。カリスマ幻想とは、社外のカリスマ経営者がたちどころに業績が悪化した会社でも立て直してくれるであろう、という根拠なき幻想を意味する。同社の取締役会もこのような風潮にのり、社外から CEO を招聘することになる。

以上の諸事実から同社の組織統治は解体されていった、という分析を提示したのが本研究である。本研究の理論的な意義は、これまで同社の転落の原因が社外から招聘された経営者の経営の問題とされてきたのに対して、それがはるかに過去に原因があり、様々な要因(言説的実践)が錯綜した出来事の結果であり、組織統治をそのようなものとして理解すべきことを例示した点にある。

すなわち、同社の組織統治の出発点は、組織の永続的成長のために実施された新事業の展開でありその成功である。また、それに応じて統治性を進化させようとした経営実践に創業者が抵抗し、過去の統治性を形骸化させてしまったことである。

さらに、彼のその行為と権威が後任の経営者に形骸化した統治性を維持し続けさせ、組織全体が現実からかい離し始めていく。

また、投資家資本主義の進展と株価至上主義という背景において、力を持ち株価に敏感となった取締役会が流行の「カリスマ幻想」という病理現象に陥ってしまったことである。

問題の根源とされた社外招聘の経営者は以上の諸要因の重なりの結果に過ぎない。また、今回のプロジェクトではここまでの解釈しか提示できていないが、この社外招聘の経営者の存在や経営は同社のその後の組織統

治にまた新たな影響を与えていくことになるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

伊藤博之、カリスマ幻想と組織統治の解体 なぜヒューレット・パカード社は CEO を社外から招聘したのか、滋賀大学経済学部研究所年報、査読無、21号、2014、21-42

伊藤博之、経営人材の社内育成とゼネラル・マネジメント 経営の「スキル」と「徳」の観点から、滋賀大学経済学部付属リスク研究センター・Discussion Paper46号、1-22

伊藤博之、組織統治論の構想 企業文化論と統治性の交差点から考える、滋賀大学経済学部研究所年報、査読無、20号、1-22

伊藤博之、コーポレート・ガバナンス論の系譜学 「よい統治」の探求をめぐる「現在の歴史」、滋賀大学経済学部研究所年報、査読無、19号、55-73

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 博之 (ITO, Hiroyuki)

滋賀大学経済学部・教授

研究者番号：20242969

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：